

# 英語教育における文化の扱い方

## PROFILE

〈監修〉

**影浦 攻**

かげうら おさむ  
(鹿児島純心女子大学副学長・教授／宮崎大学名誉教授)

広島大学卒業。教諭(鹿児島中央高校、広島大学附属中・高校、鶴丸高校)の後、鹿児島県教育庁指導主事、文部省(当時)教科調査官、宮崎大学教授(その間、附属中学校長、附属小学校長を歴任)、鹿児島純心女子大学国際人間学部長を経て現職。『小学生のえいご Book1～3』(啓林館)、『新しい時代の小学校英語指導の原則』(明治図書)、『改訂英語科新授業の実践モデル20』(明治図書)、『小学校教師の基本教室英語96選』(明治図書)、他多数。

〈連載第6回執筆〉

**岡崎 浩幸**

おかざき ひろゆき  
(富山大学大学院教職実践開発研究科長・教授)

富山大学大学院修了。富山県内の中学校に2年間・高校に20年間勤務後、富山県国際日本海政策課勤務1年、富山大学人間発達科学部を経て現職。

## ① 異文化の扱いに関する経緯

日本の小学校に英語教育を導入する契機になったのは、中央教育審議会の答申(平成8年)です。その中で述べられている国際化に対応するための留意点の1つに、「国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること」とあり、国際化に対応する教育の一環として外国語の能力を育てることの重要性が強調されました。さらに、小学校の外国語教育の充実を図るために、国際理解教育の一環として「総合的な学習の時間」を活用して、子どもたちに外国語や外国の生活・文化に触れる機会を与えることが適切であるなどの判断から外国語教育の導入に至りました。小学校における外国語の導入の意義は、単に外国語の運用力を育成するだけでなく、自分と異なる文化の存在を知り、コミュニケーションを通して体験的に理解できることです。そのことで自国の言語と文化も振り返ることができることにもつながっていきます。

平成23年度から5、6年生に導入された外国語活動においても、「言語や文化について体験的に理解を深めること」が目標の1つに掲げられ、異なる文化を持つ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めることが奨励されてきました。

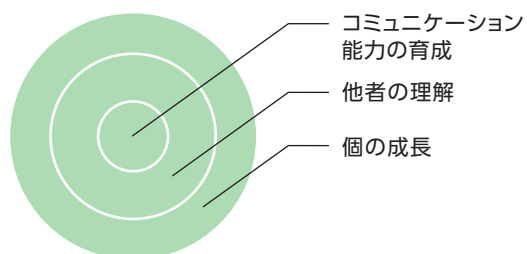
平成32年度から中学年に導入される外国語活動と高学年で教科となる外国語(英語)科においては、異文化をどのように捉えて、扱っていけばいいのかについて考えてみましょう。

## ② 英語教育と異文化理解の関係

国際理解教育・異文化理解教育が目指す人間像は、「人権の尊重を基盤として、現代世界の基本的な特質である文化的多様性および相互依存性への認識を深めるとともに、異なる文化に対する寛容な態度と、地域・国家・地域社会の一員としての自覚を持って、地球的課題の解決に向けて様々なレベルで社会に参加し、他者と協力しようとする意志を有する人間(大津、2005)」です。中央教育審議会の答申(平成8年)でも指摘されていたように、国際理解教育・異文化理解教

育は、英語科だけでなく全ての教育課程で推進されるべきもので、それぞれの学校ごとに、全教員が共通理解を持って取り組むことが大切です。極端なことを言えば、小学校において英語教育が実施されなくても、国際理解や異文化理解を達成することは可能であり、今日のグローバル社会において子どもの人間的成長に欠かせない要素であることに異論を唱える人はいないと思います。

外国語教育においては、言語を学び、言語を使って他人とのコミュニケーションを図っていくことで、多様なものの考え方や相手の文化にも興味・関心を示し、どの文化に対しても尊敬の念を抱く子どもを育てることが理想です。子どもにとっては、外国語の学習それ自体が異文化体験になります。岡&金森(2012)が提案するように(下の図を参照)、まずは英語を用いた活動という体験を通して、コミュニケーション能力を身に付け(コミュニケーション能力の育成)、次に、コミュニケーションを円滑に行うためには他者への理解が必要となり、結果として他者への理解が深まることになります。最後に、他者への理解(他者の理解)が深まるコミュニケーションを通して、世界を知ることになり、視野が広がります。異文化を理解するとともに、尊重する態度、また、異なる文化を持った人々とともに生きていくための資質や能力が育成され、人間的成長(個の成長)につながると考えられます。



### ③ 英語科における異文化の視点

平成32年度から全面実施される小学校外国語活動及び外国語科の目標の1つは以下の通りです。

#### 外国語活動の目標(3)

外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

#### 外国語科の目標(3)

外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

今回の新学習指導要領外国語科の解説では、「言葉を学ぶことはその言葉を創造・継承してきた文化や人々の考え方を学ぶことであり、言葉を用いてコミュニケーションを図り伝え合うことは互いに共感し合い、尊重しようとする態度にもつながる」と述べられています。つまり、言葉によるコミュニケーションの体験そのものが、相手を理解し尊重する態度の育成につながるということです。さらに、英語が世界共通語であることを踏まえ、外国語の背景にある文化だけでなく、英語を使ってコミュニケーションを図る人々の文化についても理解を深めることが重要であると述べ、英語圏以外の文化への配慮も示されています。

外国語活動の学習指導要領解説では「言語活動で扱う題材についても、我が国の文化や、外国語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うのに役立つものとする」と配慮を求めています。従って外国語活動の新教材及び英語科の教科書には、このような目標や留意点が具現化されることになります。子どもたちが新教材、教科書を通して取り組むコミュニケーション活動もその目標達成に向けて設定されているはずです。よって、新教材、教科書を用いてコ

コミュニケーション能力の育成を図ることは言語だけでなく文化への気付き、理解へとつながることになると考えられます。英語の指導に苦手意識を持っておられる先生も、教科書に沿ってコミュニケーション活動を実践していけば、異文化への気付き、理解につながっていくことになります。

ALTや定期的に外国の方との交流等が可能な学校では、単元の最終目標に「留学生に富山県のいいところを紹介しよう」などを設定してみましょう。自分たちの文化のどの部分を紹介することがいいのか、相手の視点に配慮した活動を体験することで異文化及び自己文化への意識が高まることになります（詳細は後述の⑥を参照）。ぜひ取り組んでみてください。

#### ④ 異文化“誤解”

文化を扱う際に避けて通れない問題として、様々な国の文化や事象を断片的に並べて、各国や各国人のステレオタイプの比較、批評をするという典型的な手法（「米国人は何々だ」「日本人は何々だ」など）の外国理解や、理想化された欧米文化の紹介がしばしば見られます（溝上、柴田、2009）。特に、小学校の先生方は小学生にわかりやすく説明するために、一人のALTなどから聞いたことをもとに「アメリカでは～～だ」と単純化して異文化の特徴を説明してしまう場合があります。子どもにとっては単純化されてわかりやすい面はありますが、一人のALTの発言や担任の海外旅行の経験のみに基づいて他国の文化や人々の考え方を一般化してしまう（ステレオタイプ）ことは、子どもたちに間違った先入観や思い込みを与えてしまうこととなります。いったん抱いたイメージや先入観は何年経過しても消えることはなく、流布して拡散していくことさえあります。このような問題を容易に解決する方法はありませんが、人を肌の色、国や民族だけで判断したり分類したりするのではなく、一人一人の個人の人間とし

て付き合い、コミュニケーションを深めていくことが何より大切です。

文化の捉え方にも注意が必要です。岡部（1996）は、文化を次のように定義しています。

文化とは、ある集団のメンバーによって幾世代にも渡って獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間—空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成である。

定義からわかるように、異文化は周りにあるものが全て異文化であると考えられます。よって、一人の中にいくつもの文化が共存していると考えられることもできます。

#### ⑤ 異文化とは外国文化？

異文化というものは外国の文化だけを意味するものではありません。“自分以外の考え方はすべて異文化である”と捉えると、異文化の人の考え方を理解し、受け入れていくためには柔軟な姿勢が求められます。このようなことを身に付けさせることは、子どもたちを新しい世界へと導いていくことにもなります。周りに存在するものの全てが異文化であることに気付き、周りの人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢と努力が必要です。

家族もクラスの仲間も、“自分とは異なる文化”に属しています。まずはこの人たちとどのようにすればスムーズに気持ちよくコミュニケーションを取っていくことができるのかを日ごろから考えさせることが大切です。

#### ⑥ 文化を扱った実践例

異文化理解の要素が入っている外国語活動の実践

例を2つ紹介します。

元富山大学人間発達科学部附属小学校の横山恵生(現富山県南砺市立福光南部小学校)は、「富山のいいところを留学生に紹介しよう!」という単元を設定されました。単元の最終授業で、子どもたちが留学生に富山の名所や名産品を英語で紹介する活動です。この活動を通して、子どもたちは言葉の運用だけでなく、異文化の方にどのようなことを紹介すれば興味を示してもらえるのか、またわかりやすく相手に富山のいいところを伝えるにはどのような英語表現を使えばいいのか、などに意識が向くようになっていきました。単元の最終日に、子どもたちは富山のいいところを伝えることができた充実感を味わっただけでなく、うまく伝わらなかったところを振り返ることで今後のコミュニケーションへの意欲を育むことができる活動となっていました。

留学生たちも子どもの説明を聞いているだけでなく、自分たちの文化も子どもたちに紹介したいと写真や民族衣装を持参して披露してくれました。外国語を通じて、自己の文化を紹介するだけでなく、異文化にも触れることで文化への理解が一層深まる活動になっていました。



2つ目は、富山県富山市立堀川小学校の3年担当の三箇智絵先生の実践です。「来月小学校を訪問されるモライアさんの歓迎会を、自分たちのクラスが担当す

ることになりました」という設定で、「どのような歓迎会にしたいのでしょうか」と子どもたちに投げかけられました。相談の結果、一緒に日本のゲームをすることになり、どのようなゲームがモライアさんに楽しんでもらえるのか、誰がどのように英語でゲームの説明をするのかなどについても話し合いがもたれました。異文化の方を迎えることを通じて、子どもたちは相手の立場になって配慮すべきことに気付いたり学んだりしていったようです。

今後、小学校の先生方が英語の指導を通して、子どもたちの中に共存している「新たな文化」を発見されることを願っています。

#### 引用・参考文献

- ・大津和子(2005)『総合的な学習における国際理解教育の構想カリキュラム』北海道教育大学教育実践総合センター紀要
- ・岡秀夫&金森強(2012)『小学校外国語活動の進め方―「ことばの教育」として―』成美堂
- ・溝上由紀& 柴田昇(2009)『「異文化理解」と外国語教育―教養教育の一形態として―』愛知江南短期大学
- ・岡部朗一(1996)『文化とコミュニケーション』古田監修、石井、岡部、久米『異文化コミュニケーション』有斐閣
- ・中央教育審議会 答申(第3部 第2章 国際化と教育)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/960701n.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701n.htm)
- ・文部科学省 小学校学習指導要領 解説  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1384661.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm)